

目的 健康な高齢者は、内外からの刺激を受け生活に潤いをもつことができるが、不幸にも要介護の状態になった場合、何で刺激を求めるか。その場合服装は最も端的な人間表現の場といえるのではないか。服装に関心が高い人、無頓着な人それぞれに独自の趣味や嗜好があり、個人の好みや何らかの感情が服装に現われる。そこで軽度障害者に焦点をあて、少しでも快適な衣生活を送るには、どんな衣服が望ましいかを探ることを目的として、高齢軽度障害者の着衣状態の実態調査を行った。

方法 特別養護老人ホーム、老人ホームを訪問して、対面聴取り調査を行い、着衣の実態を調査した。調査対象者の年齢は、80歳代が一番多く、70歳代、90歳代の順である。障害者の障害の程度は、左手・右手また半身が麻痺、足が不自由、神経痛、全盲等である。

結果 今日着用している衣服はほとんどの人が気に入っており、不満度が少ない。購入者は寮母が多い。着用衣服の外衣の形態は市販の丸首トレーナー、前開きパジャマが多い。これから着てみたい衣服形態の上衣は、衿有り、身頃は前開きボタン止め、袖口はニットまたは普通袖でカフスは好まれない。下衣のウエストは総ゴムで脇にポケットを付ける。衣服の色は、グレー系が一番多く、次いで茶系、紫、青系である。意識については、「着心地のいいものを着たい」、「いい服を着ていると言われると嬉しい」、「服を着替えることは楽しい」に肯定的で、「制服があったほうがよい」、「個性的な服が着たい」に否定的である。